

特集「社会学と構築主義の現在」によせて

木戸功・中河伸俊

1 本特集のねらい

社会学やその隣接領域において流行とってよい盛り上がりを見せた構築主義のブームが終息して久しい。とはいえ、クレイム申し立て活動に照準することを宣言したジョン・キッセらの社会問題研究に代表されるような構築主義は、社会学における経験的研究のプログラムとして、社会問題研究の範囲に留まらずさまざまな領域に応用し展開されてきた。ここでは、「構築主義」に対して厳密な定義を与えることはしないが、社会的事実を語りと相互行為という人々の不断の働きかけを通じて、進行中の過程において常に構築され続けているものとみなすような社会学における研究上の立場としておきたい。方法論的な観点からいえば、構築主義は、そうした理論的な構えと経験的研究にもとづく知見を媒介するプログラムとして、近年の質的研究の興隆とも結びつきながら一定の成果を蓄積してきたともいえよう。構築主義のプログラムが社会学研究の方法論的洗練を図ってきた一方で、それにもとづく個々の経験的研究の成果は、それぞれの研究が置かれた領域における固有の問題関心や問題構成に即した知見を示してきたものと考えられる。そこでこの特集では、さまざまな領域において展開されてきた構築主義的研究のあり方とその展望を検討するとともに、こうした研究の方法論的な可能性を吟味することを通じて、現在の社会学における構築主義の位置づけを探ること、これを全体を通してのねらいとしたい。

かつてのような機能分化した下位領域の境界が流動化し不鮮明なものとなりつつある現代社会において、いわゆる連字符的な伝統的領域区分を設定することは困難となりつつあるが、それを自覚した上で、ここでは便宜上いくつかの研究領域に着目する。そうすることによって、それぞれの領域における構築主義の位置づけを探るとともに、とりあげる研究領域それ自体のあり方についても、その一端を知ることができるのではないかと考えるからである。また、それぞれの研究領域における構築主義的な経験的研究のあり方を検討するにあたっては、本来それらが依拠している方法論を無視することはできないはずである。各領域における研究の動向と方法論の両者は不可分なものであり、その意味ではそれらを区分することもまた便宜

的なものである。

こうしたことをふまえた上で、前者については、家族、教育、社会運動、福祉、逸脱、自己といった各研究領域において、構築主義的研究が何を明らかにし、当該領域に対していかなる貢献を果たし、そこにどのように受け入れられ位置づけられてきたのかを検討することで、それぞれの研究領域における構築主義の位置づけを探っていく。また、後者については、歴史研究および概念分析の立場から構築主義的研究の方法論的な可能性を検討する。もとより本特集は社会学研究の全体を網羅するものではないが、それは構築主義の社会観や基本的な考え方によるその有用性のおよぶ範囲や、それぞれの領域によってその受容のしやすさに偏差があることの裏返しでもある。とりあげられる経験的研究の領域および方法論については、これらを考慮しつつ構築主義の現状を把握するうえで適切と思われるものを選定した。以下、掲載順にそれぞれの論考の骨子を紹介していく。

2 家族・教育・社会運動・福祉・逸脱・自己

家族社会学および教育社会学はとりわけ日本においては伝統的な連字符社会学の諸領域とみなしうるものであろう。まず「家族社会学における構築主義的アプローチの展望——定義問題からの離脱と研究関心の共有」（松木洋人）では、経験的研究の蓄積が進まず、構築主義のアプローチが「空疎化」したことが批判的に検討される。とりわけ日本の家族社会学において構築主義が受容された過程についていえば、それが1990年代の従来の核家族パラダイムを批判し新たな研究視角を求めるといふ文脈の下でなされたことにより、新たな家族定義論として限定的に受容されたことが指摘される。その上で、定義から家族生活にまつわる人々の経験へと関心をシフトさせること、さらに家族の規範変容に着目した家族変動論が展開されることが重要であると論じられる。そうした展開に際して、著者が援用をうながす方法論は概念分析の社会学のそれである。

その一方で、教育社会学は現在にいたるまで構築主義的研究の成果が着実に蓄積されてきた領域のひとつである。「構築主義研究と教育社会学——『言説』と『現実』をめぐる攻防」（北澤毅）においては、構築主義的研究の前史として山村賢明による解釈的アプローチと徳岡秀雄によるラベリング論の意義が確認された上で、とりわけ1990年代以降に展開されてきた教育問題の構築主義的研究を、同時並行的に展開されてきた2つの流れである教育問題の構築過程の記述分析と教育言説研究に大別してその動向が論じられる。前者については「不登校」「いじめ」「児童虐待」「発達障害」等の諸問題についての経験的研究の流れに加えて、計量分析の試みなども紹介される。後者については、構築主義的な教育言説分析とは方法論的立場を異にするような批判的な教育言説分析（「言説批判分析」）が大勢を占めていることが示される一方で、教育問題の構築過程の記述分析にも通じる問題の当事者の言説に焦点化する研究がひとつの潮流を成しているとされる。著者の主張のひとつ

は「言説批判分析」が支持される教育社会学に対する批判であるが、そこでは同時に構築主義それ自体の新たな展開の必要性が指摘されている。

つづいて「構築主義と社会運動論——相互影響関係と回収可能性」(濱西栄司)では、構築主義と社会運動論との関係が双方向的に論じられる。そこでは1970年代以降の社会運動論を説明アプローチと解釈アプローチに方法論的に区分し、それぞれに対して構築主義(とりわけ社会問題の構築主義)が相互に影響を与えあう関係にあったことが論じられる。なかでも、解釈アプローチのひとつとしてとりあげられるデュベに着目するならば、その「穏健社会学的構築主義」における3つの行為論理(統合論理、戦略論理、主体化論理)に則して、従来の構築主義を戦略論理に基づくものと位置づけた上で、他の2つの論理に基づく統合的構築主義および主体的構築主義の可能性が検討されることによって、構築主義にとっては未開拓の方法論的領域が残されていることが示されている。さらに「一般社会学としての社会運動研究」という文脈のもとでは、社会問題の構築主義に限らず、さまざまな研究領域における構築主義的研究に対して、社会運動論からのアプローチが可能となる。そこでは社会運動論による構築主義の「回収」という可能性が示唆される。

社会学の隣接領域への構築主義の波及をめぐって、「福祉の研究領域における構築主義の展開」(上野加代子)では、「自身の加害性の認識」と「研究結果の実践への反映」という観点から福祉領域における構築主義的研究がとりあげられ、その現代的意義が論じられる。1990年代以降のナラティヴ・アプローチの広がりに加えて、ネオリベラリズムの浸透にともなう「社会問題の個人化」とそうした文脈における「ソーシャルワークの心理療法化」に対する批判的研究の流れが検討される。そうした状況の下で自己批判のための道具ともいえる構築主義が福祉研究にとって有している意義とは、社会における国家の補完装置としての福祉という位置づけを自覚した上で、福祉の担い手自身によるオルタナティブな実践を生みだしていくところにある。より近年においては、ネオリベラリズム批判を通じた「自身の被害者性の認識」が議論され、社会変革を目指す運動が展開されてきたという。ただし日本の福祉研究においては、ナラティヴ・アプローチに基づく構築主義的研究は一定の蓄積をもつものの、英語圏の研究にみられるようなクリティカルさにやや欠いていることが指摘される。

「逸脱研究の論点とその探求可能性——ディスコース分析をめぐって」(佐藤哲彦)では、1980年代以降の犯罪の社会的コントロールの変化という新たな社会状況の下で、従来の逸脱の社会学が退潮し、それに代わって犯罪学が興隆してきたという趨勢をふまえた上で、犯罪がリスク管理技術の下に置かれる過程に加えて、そこに巻き込まれる人々が主体化する過程をいかに記述するかという観点から、逸脱研究における社会構築主義の意義が論じられる。そこで方法論的に検討されるのは、「解釈的レパトワール」というアイデアによって当事者の語りをそのローカルで個別的な遂行性という観点から記述し分析するとともに、それを超えたより大きな社会過程や社会的状況と接続し考察することを可能とする「ディスコース分析」であ

る。英国社会心理学を中心に展開されてきたこうした方法論に基づく「薬害」を事例とした分析をふまえて、逸脱研究における社会構築主義の現代的意義が論じられる。

『自己』の『社会的構築』——昔から社会学者は『自己の構成』について語り続けているが一体どこが変わったのか？（芦川晋）では、従来の構築主義的な自己論（自己物語論）が混同していたとされる役割としての自己と固有の生活誌をもつパーソナル・アイデンティティを分析的に区分した上で、自己を物語るという実践がとりわけ会話的なやりとりの中で、語り手たる人物のアイデンティティを主題化し、それを聞き手と協働で遂行的に達成するための、あるいは文字通り構築するための媒体なのであるということが論じられる。元来「自己」の構築や構成というアイデアは、シカゴ学派あるいは象徴的相互作用論の系譜において主要な主題の1つとして社会的に論じられてきたものであり、社会構築主義もその系譜の下に位置づけられる。しかしながら、ミード、ブルーマーによるI/meから、ベッカーによる人格やその経歴への着目を経て、ゴフマンの対面的相互行為状況における人格の尊厳や生活誌としてのパーソナル・アイデンティティへといたる自己論の遺産を、構築主義的な自己論は十分に生かしきれていないと指摘される。

3 歴史研究と概念分析

つづいて、方法論に照準した2つの論考を紹介する。「社会問題の歴史社会学をめざして」（赤川学）では、構築主義に基づく社会問題の歴史社会学のあり方が方法論的に検討される。そこではとりわけ歴史的事象における因果的説明の可能性が「過程追跡」の方法に着目しながら議論される。試みとして、日本における少子化対策を事例とした比較歴史社会学的分析が示されるとともに、こうした因果分析に加えて、社会問題の「自然史モデル」に依拠した「社会問題の歴史社会学」の構築が示されている。言説分析を中心とした従来の構築主義的な歴史研究の特徴である言説のレトリックとその連鎖についての精緻で厚い記述に加えて、なぜそこでその時に特定の言説が現れるのかを、すなわち理由説明を可能とするような経験科学としての構築主義的研究の必要性が論じられている。厚い記述と因果的説明は「相克」ではなく「相乗」の観点から捉えられるべきものであると著者は述べる。

「構築主義と概念分析の社会学」（小宮友根）では、1980年代後半から90年代前半にかけてのいわゆる構築主義論争の発端となった「オントロジカル・ゲリマンダリング」（OG）をめぐる問題をふりかえることで、この問題をめぐる一連の議論とその後の構築主義的研究においては、OG問題として問われていたはずの、社会問題をいかに研究するかという方法論的な問いが手つかずのままにされ、現在にいたっていることが指摘される。著者によれば「クレイム申し立て活動」に照準する社会問題の構築主義においては、「社会問題の自然史」のようにクレイムの連鎖のパターンを解明するという関心と、そもそも社会のメンバーがある状態を社会問題と

して評価する方法を解明するという関心が混在している。その上で、とりわけ後者に関して「概念分析の社会学」の観点から方法論的な検討がなされる。「クレイム申し立て活動」に照準する社会問題の構築主義に対して、その理解可能性の探求という方法論的解釈が示されることで、「概念分析」がその方法論の明確化に寄与するものであることが論じられる。

4 社会学と構築主義の現在

ここで、以上の諸論考によっていわば点描的に書き出された「構築主義の現在」像の理解の補助線として、この学的運動の社会学における揺籃の1つとなった社会問題の社会学の領域での構築主義アプローチを中心に、昨今の米国の構築主義事情を少し紹介しておきたい。科学社会学の分野からの“リフレクシヴィティ”がらみの問題提起（ウルガーとポーラッチによるOG批判）が契機になって、ポストモダンやポストコロニアル、脱構築といった現代思想の諸潮流を引き寄せつつ分野内部を揺さぶった1980年代後半から90年代にかけてのいわゆる構築主義論争の波が引いたあと、構築主義アプローチは、同学会の設立時からのデフォルトである問題解決支援と社会正義の実現を目指すアクティヴィスト志向の立場からの反発¹⁾はあるものの、米社会問題学会（the Society for the Study of Social Problems = SSSP）の中に定着している²⁾。この立場からの社会問題の社会学のテキスト（Loseke 2003）やリーディングス（Loseke and Best eds. 2003）が整備されて学部教育に使われ、モノグラフ集や大学院レベルの概説書（Best 2009; Weinberg 2014）、さらには構築主義的な調査研究の「ハンドブック」（Holstein and Gubrium eds. 2008）も刊行され、「通常科学」的な研究プログラムとしての体裁が整っている。また、たまたまのことだが、今年の8月にモンリオールで（アメリカ社会学会大会に合わせて）開かれるSSSP大会では、構築主義者で家庭内暴力とその被害者のシェルターの研究者として知られるドニリーン・ロウスキ会長のもと、「物語（ストーリー）を語るものが社会を支配する」というプラトンの言葉を解題として添えた「社会問題の世界におけるナラティブ」というスローガンに沿って、構築主義的な色彩の強いセッション群がオーガナイズされる予定である³⁾。

とはいえ、構築主義論争や、あるいは人文・社会学の分野での「構築主義者」のインフレ現象（Hacking 2000=2006）が一段落したあと、多彩な構築主義的な提言やプログラム（たとえば、この特集でカバーできなかったものでいえば、科学的知識の社会学（SSK）におけるストロングプログラムや、医療社会学における医療化論、感情の社会学における感情労働論、セクシュアリティ／ジェンダーの構築主義、ケネス・ガーゲンら社会心理学の社会構成主義、精神医療などでのナラティブ・アプローチ、エルンスト・フォン・グレザーズフェルドらのラディカル構成主義、あるいは、現在SSSPで一部会を占めるドロシー・スミスらの制度のエスノグラフィなどなど）が、統一された（あるいはせめて生産的なやりとりが可能な）

基盤の上に立つようになったなどということではなく、社会問題の構築主義の陣営内でさえ、取るべきスタンスや方法論的基準について必ずしもコンセンサスが成り立っているわけではない。そうした状態を、上記のハンドブックの緒言でジェイバー・グブリアムとジェイムス・ホルステインは「構築主義のモザイク」(Gubrium and Holstein 2008)と呼ぶが、「この[モザイク的な]多様性こそが、構築主義の強さと魅力の一部なのだ」という2人のコメント(Gubrium and Holstein 2008: 7)は、経験的探究の方法論についての語り方としては、お気楽のそしりを免れないだろう(方法論はビュッフェの料理の品揃えではない)。

とはいえ、過去の構築主義をめぐる論争とその後のこのモザイク的で落ち着いた現実、構築主義者の今後の取り組みの真剣さしだいでは、社会学全体の方法的基準(つまり社会学はどんな対象をどのようなやり方で明らかにする探究なのかについての約束ごと)の再構成に貢献する好機として回顧できるようになるかもしれない。そもそも、ジェンダー／セクシュアリティや、自己や、感情や、自然科学の知識を社会的に構築されたものだとする主張は、エミール・デュルケムがというような意味での社会学主義の現代的表現と違って差し支えないだろう(中河 2013)。そして、ウールガーらのOGのクリティーク(Woolgar and Pawluch 1985=2000)にしても、ひとり社会問題の構築主義的研究だけを対象にするものではなく、社会的な説明一般(とりわけ因果モデル的な説明)の手順の「解剖学」として提示されたものだったはずである⁴⁾。社会問題の構築主義に限らず、構築主義をめぐる過去の論争は、そこからトレンドなポスト○○の現代思想的ファッドを差し引くなら、社会学の経験的探究はどのようなものであるべきなのかを掛け金にした、そして、良くも悪くも、これまでの社会学の方法をめぐるさまざまな論点や難問がかなり総ざらい的な形で動員されたものだったと回顧できる。1960年代後半から70年代の「政治の季節」に退潮した、それまでの「社会学の仕方」として主流の構造機能主義の(当時としてはそれなりによく考えられた)方法論を、いわゆる「中範囲」の限定をつけながら乗りこえようとする試みがマルコム・スペクターとキツセによる社会問題の構築主義のプロジェクトだったわけであり(社会問題以外の分野の構築主義についてもおおむね同様のことがいえよう)、そして、それに対するクリティークには、方法論的検討を深めることによってしか応えることはできない。

そういう意味では、この特集の論文の多くが、経験的研究のレビューと並行する形で、OGやそれ以外の課題についての方法論的検討をおこなっているのは自然なことだと思われる。広義の「構築主義」には、かなり大まかなまとめ方をするなら、人文・社会科学の言語論的(あるいは語用論的)転回以降の知の地平での、(1)対象の構築性の「暴露」(ジョエル・ベストのいう vulgar constructionism (Best 2008: 45-7)), (2)方法的自省(認識論／知識社会的な意味でのリフレクシヴィティ論)とそこから導かれる研究者の言説の権力性の自覚、(3)社会的な事実として「ある」事柄(つまりは社会的に構築された客体)が相互行為的および歴史的にどのように成り立っているのか(あるいは成り立ってきたのか)の経験的な記述・

分析の3つの側面を混在させたものだったといえるだろう。上野論文は(2)に⁵⁾、そして、他の論文はどちらかといえば(3)に焦点を合わせて、方法論的議論をおこなっているといえる。濱西のトゥレーヌ派社会運動論とのクロスオーヴァーのヴィジョンや、佐藤によるディスコース分析、赤川による比較歴史学的手法、小宮による概念分析の提案はいずれも、構築主義的な経験的研究のプログラムを洗練させ、もしくは再編するための方途として真剣に検討する値打ちがあるだろうし、また、松木論文、北澤論文、芦川論文は、シンボリック相互作用論にエスノメソドロジーの洞察を加えて定式化されたスペクター／キツセの社会問題の構築主義やホルスタイン／グブリアムの自己論を、そのエスノメソドロジー的な部分を強調する形で再活性化しようとする試みとして読むこともできよう。先に、構築主義は、デュルケムがいうような意味での社会学主義の現代的表現とみることができると示唆した。物象化論や集合表象論、ラベリング論、動機の語彙論／アカウント論、自己とアイデンティティの相互行為的構築を示唆するゴフマンの自己呈示論といった、「社会学ならではの」先行の着想や説明様式が構築主義へと流れこんでいる以上、そういう言い方も、必ずしも大風呂敷の広げすぎとはいえないだろう。したがって、この特集の、またその他の場所での経験的探究の方法としての構築主義をめぐる議論は、社会学という学的領域全体にとって決して無縁なものではないはずだと改めて申し述べて、この長くなった「前振り」を締めくりたい。

[注]

- 1) 2013年の大会を組織したデロ・ブオノの「社会問題の再想像——社会構築主義を超えて前進する」と題されたSSSP会長就任演説(Buono 2013)は、そうした批判的スタンスの表明の一例である。アメリカ社会学会では満たされない社会問題への実践的関心の追求を掲げて設立され(初代会長はアーネスト・バージェス)、C.ライト・ミルズの名にちなむ賞をもつこの学術団体のscholar activistたちの多くにとって、学会が揺籃となったラベリング論と構築主義は、問題解決のためのアクションにとって批判的ツールになるという意味で役に立つものであると同時に、実践的解決と結びつかない「理論のための理論」になり、さらには「無責任な相対主義」に陥りかねないという意味で、両義的なものであり続けているといえるだろう。
- 2) 構築主義者は、この学会の理論部会を足場にして学術活動を展開してきた。数年前に同部会のニューズレターに掲載されたアンケート結果によれば、回答した107人の部会員のうち、自身は「スペクターとキツセの系譜につながる構築主義者」だと答えた部会員が40.1%、「それ以外の系譜の構築主義者、もしくはスペクター／キツセの路線に他の要素を加味した構築主義者」が36.4%、「インターアクションニスト」が33.0%、「解釈学派の社会学者」が29.5%だったという(*Social Problems Theory News*, Spring 2008)。
- 3) “Globalizing Social Problems Narratives”と題されたセッション(セッション127)では、本特集に関わった者を含む日本の研究者による報告が予定されている。
- 4) しかし、この論争を直接・間接に知ることになった非構築主義の社会学者の大方はそれをそのようには受け止めず、他人事、つまりは構築主義という新奇なアプローチの方法的困難を示すエピソードとしてスルーしてきたようにみえる(そうした傾向の管見の範囲での例外として、盛山(1995, 2011)を挙げることができる)。

- 5) ソーシャルワークのような、ワーカーとクライアントが織りなす現場での処遇実践を取り扱う応用系の社会学の社会学では、関心の第一番がこのようになるのは理解できる。

【文献】

- Best, Joel, 2008, "Historical Development and Defining Issues of Constructionist Inquiry," James A. Holstein and Jaber F. Gubrium eds., *Handbook of Constructionist Research*, New York: The Gilford Press: 41-64.
- Best, Joel ed., 2009, *Images of Issues: Typifying Contemporary Social Problems*, New York: Aldine de Gruyter.
- Buono, R. A. Dello, 2013, "Reimagining Social Problems: Moving Beyond Social Constructionism," *Social Problems*, 62 : 331-42.
- Gubrium, Jaber F., and James A. Holstein, 2008, "The Constructionist Mosaic," James A. Holstein and Jaber F. Gubrium eds., *Handbook of Constructionist Research*, New York: The Gilford Press: 3-10.
- Hacking, Ian, 2000, *The Social Construction of What?*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press (=2006, 出口康夫・久米暁訳『何が社会的に構成されるのか』岩波書店.)
- Holstein, James A., and Jaber F. Gubrium eds., 2008, *Handbook of Constructionist Research*, New York: The Gilford Press.
- Loseke, Donileen R., 2003, *Thinking about Social Problems: An Introduction to Constructionist Perspectives*, 2nd ed., New York: Aldine de Gruyter.
- Loseke, Donileen R., and Joel Best eds., 2003, *Social Problems: Constructionist Readings*, New York: Aldine de Gruyter.
- 中河伸俊, 2013, 「構築主義で何をするのか——経験的研究の方途の成熟のために」中河伸俊・赤川学編『方法としての構築主義』勁草書房, 1-13.
- 盛山和夫, 1995, 『制度論の構図』創文社.
- , 2011, 『社会学とは何か——意味世界への探究』ミネルヴァ書房.
- Weinberg, Darin, 2014, *Contemporary Social Constructionism: Key Themes*, Philadelphia: Temple University Press.
- Woolgar, Steve, and Dorothy Pawluch, 1985, "Ontological Gerrymandering: The Anatomy of Social Problems Explanations," *Social Problems*, 32(3): 214-27 (=2000, 平英美訳「オントロジカル・ゲリマンダリング——社会問題をめぐる説明の解剖学」平英美・中河伸俊編『構築主義の社会学——論争と議論のエスノグラフィー』世界思想社, 18-45.)